

週刊教育資料

2016年7月4日号

No.1393

EDUCATIONAL PUBLIC OPINION

http://www.kyoiku-shiryō.co.jp

>>> 好評連載

- 教育問題法律相談【少年事件の際の家庭裁判所の処分】三坂彰彦／弁護士
- 危機管理【PTAの会費徴収で、違法性が認められなかった事例】佐々木幸寿／東京学芸大学副学長
- 特別企画【小学校段階のプログラミング教育で「取りまとめ」】



▼資料「デジタル教科書」の位置付けに関する検討会議・中間まとめ
 ◎「デジタル教科書」の位置付けに関する検討会議

▼マイオピニオン「デジタル教科書は慎重に」
 ◎菱村幸彦／国立教育政策研究所名誉所員

▼校長講話「子どもにも返事を出したらさらにまた返事が来ました」
 ◎野口晃男／前盛岡大学非常勤講師・元岩手県盛岡市立中野小学校校長

▼潮流「全国の仲間を支えていく組織に」
 ◎池端庄一郎／全国公立学校教頭会会長、川崎市立荏宿小学校教頭

池端庄一郎

いけはた・しょういちろう◎昭和31年、石川県生まれ。大学卒業後、川崎市立鷺沼小学校、同神原小学校、同川崎小学校に勤務後、川崎市立西生田小学校教頭に。現在は同市立荏宿小教頭。この間、平成26年に神奈川県公立学校教頭会会長、同27年全国公立学校教頭会副会長、同28年から全国公立学校教頭会会長。

「先生の子どものころはね」「私の育った時代はね」などと子どもたちに語るとき、教師は何をどのように語っているのだろうか。本書を読んで、私自身が語っていたのは「個を超えた時代」「歴史」ではなく、個人的な「思い出」話であったり、身近に見られた状況に過ぎなかったのではないかと思いついた。

この本に登場するのは1963年生まれの父親、同じ年の母親、「生意気盛り」の中学3年生の長女と小学3年生の次女の4人家族。「お父さんって、子どもの頃はこういう時代に生きてたわけ？」と問う長女の一言をきっかけに、父親は正月休みを返上して図書館にこもり、自分が子どもだったころの「歴史」をたどっていく。娘との問答のなかで、戦後多くの人々が求めてきた「生活の豊かさ」とは何だったのか、「幸せ」とは何なのかに考えをめぐらす。



娘に語るお父さんの歴史

重松 清 著
 497円 新潮文庫
 ☎0120-468-465

娘に語るお父さんの歴史

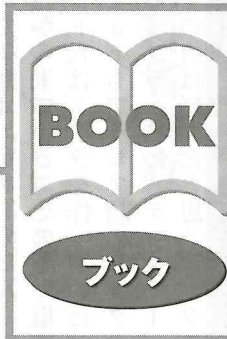
作ってきた時代を見つめ直してみることが、今を生き、未来に生きる子どもたちにかかわる教師として、極めて大切なことではないかと感じた。

本書は、著名な直木賞作家のノンフィクション的フィクション作品である。

(元川崎市立中学校校長・青木幸夫)

制度、児童福祉白書と教科書の無償配布、まかり通った「標準世帯・欠損家庭」という表現、鉄腕アトムや仮面ライダーの登場—それらの事象や事物には、その時代の状況や当時の価値観が色濃く映し出されているのだということに気づかされた。

私たちの育った時代は、そしてその時代の教育、子どもたちが置かれていた環境、世界の状況はどうだったのか、自らを形成してきた時代を見つめ直して

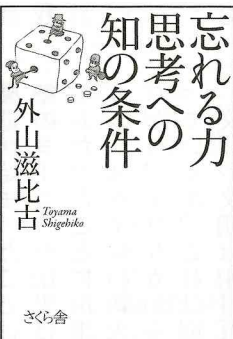


風に書かれているものである。一般的に「忘却」は悪であるという考え方に対して、「うまく忘れることが必要である」とことを主張し、以下の様な例を挙げて説明している。

教師や保護者は、子どもたちが「忘れること」を否定的な意味で捉えることが多い。学習において「よく覚えよ」「忘れてはいけない」と教えている。ところで、授業の合間の「10分休み」は、なぜ必要なのか？

「休み時間は学習の一部としてみなし、頭の整理の時間」である。したがって、「じっとしているより体を動かしたほうが、忘却が活発になる」という提案である。つまり、「忘れること」で新しい知識を吸収できることや「上手に忘れることが大切であること」、そして「休んで忘

本書は、「忘れる力とその力が思考につながる」という筆者の考えを彼の体験や教育現場からのエピソードを基にしてエッセー



外山 滋比古 著
 1512円 さくら舎
 ☎03-5211-6533

忘れる力 思考への知の条件

育とは？単に詰め込んだ知識を記憶としてとどめ忘れないようにする教育ではなく、知識を活用して思考する教育、子どもたちの創造力を育成する教育が大切であることを、本書を通して再認識できた。また、これまで日常の様々なことについて一般論で片付けていたことが、立ち止まって再考する良い機会になった。

(愛知教育大学教授・高橋美由紀)

れる「ためには、休み時間は教室から飛び出して友だちと遊ぶ方が望ましい」とした考え方を展開している。

また、学生の論文指導から、知識がある優秀な学生とあまり勉強していない学生を比較して、前者は参考文献の引用ばかりでつまらないが、後者は知識がないため自分の頭で理屈をこね、良い論文を書いた例を挙げている。そして「知識は大切であるが多すぎると、知識に溺れることになりやすい。ことに新しい知識は、われわれの思考力を麻痺させるからおそろしい。」と結論づけている。

次世代を担う子どもたちの真の教育とは？